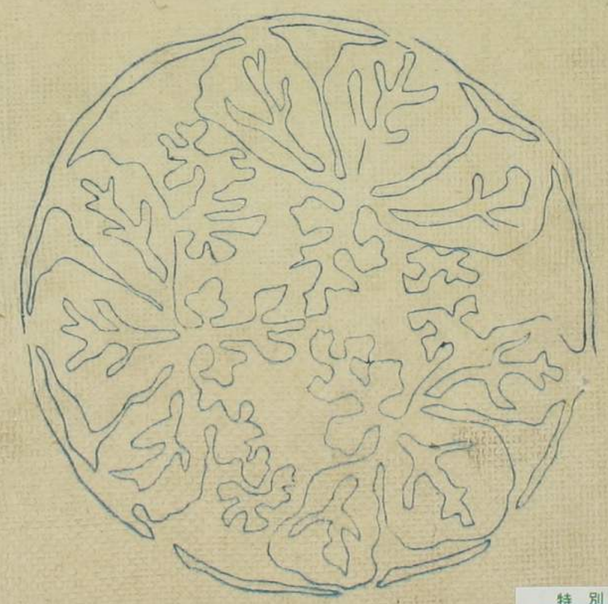
桃洞遺筆 第二輯 卷中



特別
二1
4263
5

=1
4263
5

河崎昆蟲文庫

桃洞遺筆巻之五目録

鮃魚　附戴帽魚
阿通斯　附勾芒木
白鶏
錦帯花　附十姉妹
小松上寄生
秋海棠　附白秋海棠
金雀花　附飛來鳳
棒蘭　附石蘭
細馬
一年栗　附二度栗　三度栗
自然生緑礬
瑇瑁
雑桜樹
榕　附雅都萬屢　菩提樹　波羅蜜

内閣文庫

宮内省圖書寮

桃洞遺筆卷之五

紀伊　小原八三郎源良直　録

鱗魚　附載帽魚

本邦西南海に多く産する、俗ヤガラと呼ぶ魚也、一名笛吹魚、筑前イトヨリ、肥前○同名なり　鱗魚、本朝食鑑ヤハヅ、伊勢タツ、同亀山○直云、海産魚譜巻五ホタツといふ、青バモなり　形状海鰻鱧の如く、小形るハ長さ二三寸、大なるハ長さ四五尺、全身赤黒色小〳〵て細文あり、又微小の鱗あるもど、無鱗の如くホ

見ゆ、頭至りて大小、背長く、體の長さ三尺ばかりなべ背の長さ一尺許ばかりて、肉形く硬し、宛も竹火筒(ヒフキタケ)の如し、目も至りて大小、口小さく、鰓の下小短小の鰭ばかり、又尾も近くして兩鰭ばかり、上下ない鰭なし、尾ハ小くして岐ばかり、其岐中より赤き絲長く出ず、肉色白色形り、諸書小、味佳形名ぶとい へど、冬月を美味なるを形形是、直云、鱗魚ハ、今本州ハ産ばるを形一形らぶ、一種、全身深紅色のものばかり、淡黒色のものばかり、俱ハ形ハ同し、又一種、青黒色ハ、尾岐ハ長絲形きものハ

是、魚戸小て青ヤガラといふ、又一種、背短きを形ばかり是、ハ形小を淡紅深紅淡黒の三色ばかり、又一種、全身淡紅色小して、背短く鰊魚(ナマヅ)の如く長き口髭ばかるものばかり、體を幅廣く、末ハ至りて急小細し、鱗を本條ハり微大なり、頭ハり尾小至り、腹通りハ黒點ばかり、尾ハ甚小小して岐なし、本州田邊ハてウソフキ、熊野ハてハ形を笛吹魚といふ、此外猶種類ばるべし、俗小此魚の嘴をもて、膈噎の病を治ずといふ、本朝食鑑(巻八)小、今使喧膈反胃之人、啣蓑魚之嘴、而自其嘴中納

食則其食不反此未試之といへり、

直按ずるに、今世に流布せる、丹波康頼が神遺方といへる書三巻ありて、中巻に、毋乃波支牟称屠治寸流毋乃能久寸里とある方中に、耶波豆を用ふ、然るに、此書に載る諸方を考るに、古代の方とも思はれぬ、信用しがたき処多し、恐らくは後人の偽撰なるべし、和漢三才圖會巻四十九に、患膈噎人用蕣魚背飲食則治云然往々試之不必然といふ、今も亦然り、

大和本草巻十三に、鮹魚本草ヲ見ルニ、今關東ニヤガラト云フ魚是乎といへるは誤なり、鮹魚を俗にタコと訓るも非なり、いまだ何物とも考へがたし、又院本に、だいたう魚は、俗にヤガラといふ魚にて、禁断の場所へは必ずより集る云々といへるによりて、世俗戴帽魚をもて、ヤガラの事とし、そは稲若水の説にして、東涯の名物六帖、動物篋下に、秉燭譚巻四等に出ぬ、然れども、其引處の明の鏐績が霏雪録の文に、安南國有一種魚、鋭首無鱗、有骨若栢箭、然味似河豚、名戴帽魚、華夷虫魚續考巻十、彙苑詳註巻三十五同文彙とあり、とあるにて、ヤガラよりも充ざるべし、本

草啓蒙（巻四十）ニ、ヤガラハ、魚品ノ火筩鮨ナリトいへり、直云、明の顧起元が魚品一巻を、續說郛（号四十二）の中ニ收む、其文ニ、有鯿ハ頭、身横視之圓如盤、而側甚薄、大者曰鰯、腹脊多腴（此一段、あくまで引くハ無用ニ似と出ども、下の陳鑑が誤を見る為ニ抄ク）有鮮、身圓如竹、頭尖而喙長、俗所名火筩鮨也、善喀諸魚而品下、とハ、又檀几叢書（初集巻四十八）の中ニ、清の陳鑑が江南魚鮮品一巻ハ、あきまへ、有鯿魚、頭甚小、身横視之圓如盤、而側甚薄、腹在其腹有火筩魚、亦曰鰯、脊多腴、有鮮魚、身圓如竹、頭尖而喙長、亦類火筩、

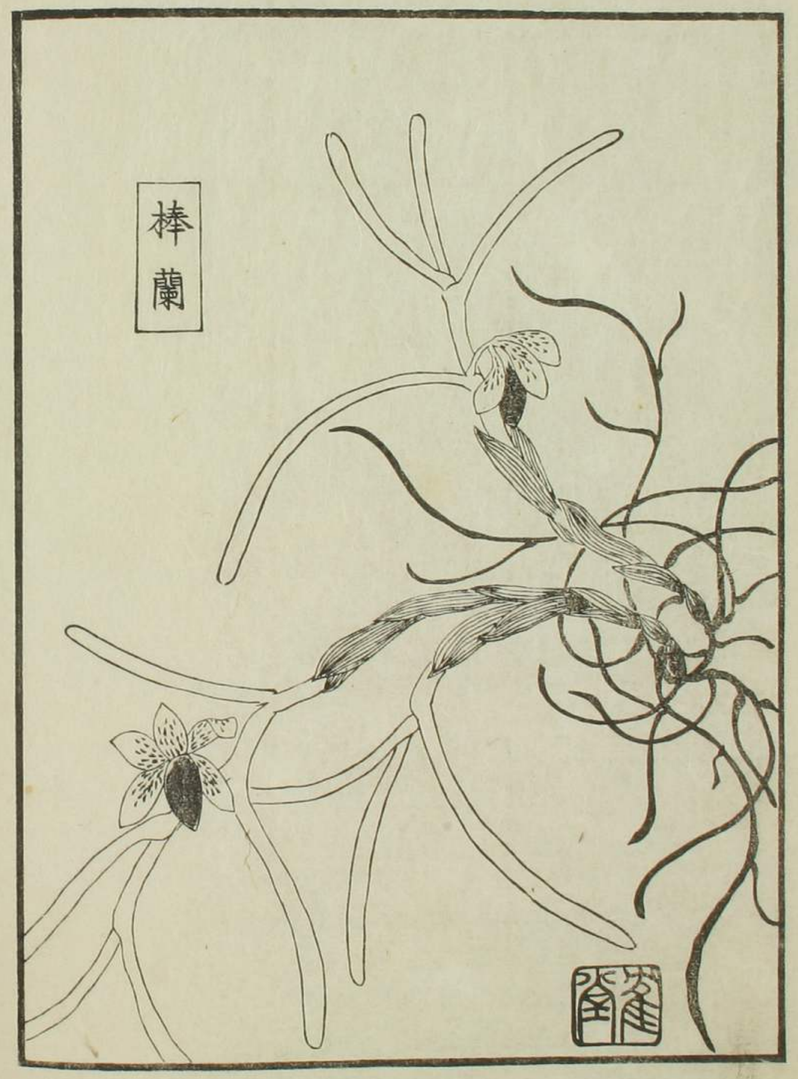
鰯音格、據正字通作鰯為正

善喀諸魚而品下、と見えたり、鯿魚ハ、魴魚（ヲヒキウヲ）の一名ニ、本草啓蒙（巻四十）ニ詳ニ、顧氏の說ニハ、鯿魚の大形なる物を鰯とし、又火筩鮨を鮮の一名とし、二段ニ別てり、通雅（巻四十七）ニも、客座贅語、謂鯿大曰鰯、多腴、有鮮、俗所名火筩鮨也と見ゆ、客座贅語も、顧起元が作なれば形ち、又陳氏の說ニも、鯿魚の外ニ鰯を載せて、火筩鮨と同物とし、又外ニ鮮魚を載せて、其說、處ヤガラをいへり、三段ニ別てり、予按ずるニ、鰯と鯿と二物ニ別つも誤なるべし、火筩魚と鮮魚

と別物となせるハ是非知るべかゝらぬ、故ヨヤガラ
ホ、鮮の字を用ふるハ害なし、さ程ど此字ハ、品字箋、
續字彙補、字典、字貫等ホハ見えず、正字通、增補字彙
並ニ交集中等ホ、鰯の下、通雅の文を引き、鮮の字ハ載せれ
ど音を出さず、明代の俗字形るべし、火箭鏑の名頗
奇といへども、兩説混淆ヨ渉ル、

棒蘭　附石蘭

本草綱目巻十三ホ載る、釵子股モ、一名虫寄生、質問本草まゝ
海斑虎同上といふ、今花姑ヨ栽る棒蘭是形り、琉球ヨ多
く産ず、本邦ハ九州、及び本州熊野深山中の
木石ホ寄生ず、形圖の如く、長さ一尺五六寸、葉ハ圓く
箸の如く互生ず、深綠色形り、水松の形ヨ似るモ、
薩摩ホて水松蘭といひ、筑前ヨてキミル、肥前ホてマ
ツランといへり、六月花ハり、淡黄色ホて蕊ハ紫黑
色形り、又全く紫色のモ形り、花後角を結ぶ、蘭花角
ヨ似て小形り、根ハ淡黑色ホて蚯蚓の如し、抄羅ヨ
著けてらし、棒蘭モ、モと琉球の方言形り、中山傳信録
巻六の物産ホ、棒蘭、形如珊瑚樹、緑色無葉、花從極間出、似



蘭較小と見えたり、

直云、山中信古の説に、廣東新語巻二十七に、鹿角蘭、葉細如鹿角海藻といへるもの、釵子股と同物なるべし、

同書此下に、有石蘭、生於石上、與相類、葉長サ四五寸、小而柔韌、花色淡白といへる石蘭を、本草啓蒙巻九に、釵子股の一名と入るハ誤なり、此石蘭を歐蘭の属なるべしといへり、又草木育種後編巻下に、廣東新語の鹿角蘭を、入面蘭（ウラモテラン）と充つ誤なり、入面蘭を質問本草附録に、清の閔叙が粤述の屈子花なり是なり、次編に

詳ニ出ル、○因ニいふ、石蘭ハ同名多シ、一ハ楚辭ニ出リ、離騷草木疏（巻一）ニ、仁傑按、石蘭、即山蘭也、蘭、生水傍及水澤中、而此生山側、荀子所謂幽蘭花生於深林者、自應是一種、故離騷以石蘭別之といへり、山蘭ヲ和名ヒヨドリバナといふ、一ハ、汝南圃史（巻十）ニ、萱艸一種單葉、秋開花、其枝勁、結子々圓而黑、俗名石蘭といへり、即單瓣ノ萱艸形ノ、一ハ、本草綱目（巻二十）石韋の釋名ニ出づ、通雅（巻四十一）ニも、石韋曰石蘭といひ、石韋ハ和名ヒトツバといふ、一ハ阿部櫟齋の聯珠詩格名物圖考（巻二）ニ、春蘭、即歐蘭也、又名報春先、出花鏡、山野皆有之、予曾祖將翁、質之清客、則曰石蘭也、然非楚辭所載者也、といへり、春蘭ハ俗称ホクリといふ、一ハ格致鏡原（巻七十六）ニ紺珠云、石蘭似蘭而小、生澗邊、雑貪其花輙醉、とこれハ何物ゾいまゞ考へバ

阿通斯（アツシ）

蝦夷の方言、アツ、又アツニと呼ぶ木を、信濃和田峠ニて、ウバ子レと呼ぶ、夷人其皮を績して布とし、おまを、アツシといひ、松前ニてオヒヤウといふ、

直云、和訓栞（前編巻二）ハ、蝦夷人の衣をいふ、といへり、志ゐの皮もて造る物也といへど、神世の風俗の淳〳〵、或をちひやうといふ木の皮もて織とぃふ、是志ゐの夷名ハやといへるハ混せり、シナハ別種ハ〳〵て、マダノ木（南部）なり、次編菩提樹の下ハ辨ず、

享和元年、予日光山採藥の時、九藏峠ハて、此木の一株懸崖ハ倒垂せるをミる、葉互生、形榆葉ニ似て末三尖或ハ五尖、ヤグルマサウ矢車草の一葉を離レ〳〵ニ成るが如し、皮甚柔韌ニ成り、枝を裂きて是を引くハ、皮ハ直ハ根ニ至る、其韌ニ成ること

を知るべし、九藏峠ニ登りしハ、五月朔日なり、此時花実を著けず、土人ニ質問せべし、漢名未考、榆の屬なり、

直云、一說ニ、明一統志の勾芒木ニ充り、本書（巻八十四）を考ふるハ、梧州府の土産ハ、勾芒木、皮可績為布、陸川縣出といへり、又明の鄺湛若が赤雅（巻上）ハ、南方草木可衣者、曰冉服、績其皮者、有勾芒布、紅蕉布、弱錫衣、と見ゆ、又宋の樂史が太平寰宇記（巻百五十七）廣州信安縣の下ニ、勾緣藤を載せて、南人績以為布といひ、清の陸武園が粤西偶記（說鈴前集巻二十三）ニ、勾芒木、其皮可績為

芝與芒字畫相似芝恐芒誤

布といへりこれ形状を見せず、且北地の産ゆゑ
ざまざまの當てもいひがたし、

細馬

唐書（卷四十八）百官志（三）に載る、細馬は上馬の事なり、唐六
典（卷十七）に、典廐令掌繫飼馬牛、給養雜畜之事、丞為之貳、
凡象一給二丁、細馬一、中馬二、駑馬三、駞牛騾各四、驢及
純犢各六、羊二十、各給一丁といひ、又（同卷）凡馬有左右監、
以別其麤良、以數紀為名、而著其簿籍、細馬之監稱左麤
馬之監稱右、といへり、本　邦にても、古は細馬の字を
用ふ、延喜式（卷四十八）左馬寮に、五月六日、競馬（クラベウマ）并騎射（ウマユミ）式、右
當日、早朝鞍細馬十疋、と見えたり、
直云、廐牧令に、凡廐細馬一疋、中馬二疋、駑馬三疋、義
解（卷八）に謂、細馬者上馬也、駑馬者下馬也、といへり、按ずに
るに、細を細作の細の如し、埤雅（卷五）に、傳曰、狡兎死、良
犬烹、良犬、即今細狗と、宋史（卷七十四）の禮志（二十四）に、鷙鳥
細犬、醫書類に、細墨細酒などの細と同し、中馬は、本
居内遠云、信濃松本飯田邊より、尾張名古屋へ通ふ
商駄馬を、今も中馬といひ、その道をも中馬街道と

いへりと、駑馬ハ、玉篇（巻二十三）ニ、駑乃乎切、最下、馬といひ、諧聲品字箋（夫聲第五十）ニ、駑馬、頓劣也、凡馬給宮中之役者曰駑、駑駘皆下乘（ジョウ）といへり、

白鴞

本草啓蒙（巻四十五）ニ、鴞ノ一種、シロフクロフハ、略シテシロフクロト云フ、松前蝦夷ノ産ナリ、羽色白クシテ紫斑點アリ、揚弓ノ矢ニ用フ、といへり、先年、摂津東成郡中濵村の樹林中ニて獲るもの、左ニ圖するが如し、又今茶家ニて、拂末（ハバウキ）ニ造る、毛羽赫黄色ニして、紫斑ありるも

のをシマフクロフ畧してシマフクともいふ。ちなも
蝦夷の産ゝして白鶏の類なり。方言クン子リキと云。

一年栗　附二度栗　三度栗

南海諸州稀ゝ産ゝ子生ずして其年花實ゝり。高さ二
尺許。形状常品と同し。按ずるゝ唐の劉恂が嶺表録異
巻三ゝ廣州無栗。惟勒州時珍本綱巻廿九。廣州作廣中。勒作靳。山中有石栗。
一年方熟。皮厚而肉少。味似胡桃仁。又熟字下有圓如彈子四字。無肉少二字。
熟時。或為羣鸚鵡啄食畧盡。只此石栗亦甚稀少といへ
るもの。恐らくハ是かゝらん。

直云。南方草木状巻下ゝ石栗花開三年方結實といふ
ハ。土地の異形るべし。又桂海虞衡志。果志嶺南雜記巻下
の石栗ハ別物なり。○直又云。一種二度栗ゝり。并河
永が大和志巻十六ゝ山邊郡福住村出栗。一歳再結實。
呼曰二度栗と見えゝり。又三度栗ゝり。本朝食鑑巻四
ゝ上野州下野州有山栗。極小。一年三度收栗。故號三
度栗といひ。因幡志巻二末ゝ法美郡宇治山ゝ産ゝと
ゝひ。紀伊續風土記巻六十九ゝ牟婁郡栗栖莊芝村。又巻七
十二同郡佐本莊西栗垣内村。又巻八十同郡三里郷一本

松村等ハ産ハる事を載ハ。此外越後。信濃。石見。土佐。筑前等ハも産ハ。一名山ゞり、詩經名物辨解 梶原ゞり 石見ゞ ハふ大抵年妻郡ハ産そる物そ。其山を年々一度ハ焼く。其焼株ハり出る新芽ハ實ハるなり。七月の末ハり。十月頃まで。本中末と三度ハ熟そるを云ハり。三度花を開きて實を結ぶ物ハいのハ。皆其地の名産とそハど。何ハの國ハも産ハる物ハるべし。

錦帶花 附十姉妹

宋の宋祁ゞ益部方物畧記 説郛弓六十七 收之の錦帶花。一名髻邊嬌 津逮秘書第八集所收本、髻作鬢、品字箋丙集云、髻同鬢、そ楊升菴文集 卷七十九 ハ略ハて鬢嬌ともハふ。又海仙花、ハ畜集 文官花、廣群芳譜引杜詩注 ○直云、華夷花木考卷四ハ、弄色芙蓉を文官花といふ、同名異物なり。日月花清俗等の名ハう、俗ハ箱根ウツギ、花ウツギといふ、樹の高さ一二丈、枝多く繁る、葉そ楊櫨（メニウツギ）ハ似て毛茸なく、春新葉出て後、葉間毎ハ各一花ハり、形風鈴の如く、筒子様（ヅヽザキ）ハして先五ツハ分ハ、上ハ向ひて開く、初白色、後漸く粉紅色ハ變ハ、日を經て復深紅色ハ變ハ、一枝ハ紅白交そり、觀て麗ハ、和漢三才圖會 卷八十四 ハ、錦帶花をジゲンジハ

充るハ誤ル、ジゲンジハ芄花（本草綱目 巻十七下）なり、
直云、大和本草（巻十二）ハ十姉妹を出して、箱根ウツギを充て、錦帯花を其下ニ併せて一物とするハ誤れり、既ニ篤信引く處の名花譜を考ふるハ、卅九葉ハ、錦帯、又名鬢邉嬌、春半開、花形如小鈴、紅粉相間、色韵而媚、植之屏蘺、可供雅玩といひ、又卅六葉ニ十姉妹、花開小（秘傳花鏡巻四云、花似薔薇而小、十葉磬口）而一蕚十數花、故名一蕚中分紅紫粉白數色、深淺斑爛自成行隊也、七姉妹花相似、而七朶連綴、亦甚可観といふて、別條ニ出セ、

此外ニ、花史左編（巻四）、汝南圃史（巻八）、八種畫譜（木部）、草花譜（續說郛弓四十）、秘傳花鏡（巻四）、重訂遵生八牋（巻十六）、増補致富全書（巻二）等も亦然り、混して一物と形容べかゝ、十姉妹ニ今花戸小菩薩イバラと呼ふ薔薇の類ハ、形狀千葉薔薇ニ似て小さく、一房ニ十花許を着く、七朶の物を七姉妹ハ、花開きて久し堪ふ、初白色より粉紅色、深紅色、或ハ紫白色ハ變して、一叢ハ數色交て美麗なり、清の李笠翁が閒情偶寄（巻五）の姉妹花の條ニ云、花之命名、莫善于此、一蕚七花者、曰七

姊妹一蔕十花者曰十姊妹觀其淺深紅白確有兄弟姊幼之分殆楊家姊妹現身乎予極喜此花二種並植彙其名為十七姊妹と又清の秦嘉謨が千支集錦卷八る撷芳譜を引きて姊妹花一名庚辛花といへり又舶來の鳥る十姊妹ゆり三編第八卷小詳るに

自然生緑礬

文政紀元戊寅の秋奥熊野花井莊楊枝谷の銅穴中より自然生の緑礬を出に極て上品ゆり中まて大塊の物も高さ一尺五寸許幅貳尺餘小巖の形を形して緑色透明瑠璃の如く至りて美麗ゆり然るも久しく風日をうれば外色變して味噌様の色ゆり如し打破るに中の色初の如し石膽の久しく其色變ぜざるる異ゆり按るに唐の蘇恭が唐本草注證類本草卷三る其絳礬本來緑色新出窟未見風者正如瑠璃今人謂之為石膽といへるを見るに唐山る産るゆり

直按るに明の宋應星が天工開物燔石第十一卷る山陝燒取硫黄山上其滓棄地二三年後雨水浸淋精液流入溝麓之中自然結成皂礬取而貨用不假煎煉其

中色佳者、人取以混石膽云、と見えたり、

小松の寄生

本草綱目、（巻三十七）桑上寄生の集解、韓保昇が説に、諸樹多く有寄生、萃葉並相似、云是鳥食一物、子糞落樹上、感氣而生、といへるを、寇宗奭あやまりを駁して、若以為鳥食物子落枝節間、感氣而生則麥當生麥、穀當生穀、不當生此一物也、といへり、本草啓蒙（巻三十三）に、宗奭の説を明なりとし、按ずるに、予先年、奥熊野北山郷桃崎村を過るに、或家盆種の小松に寄生あり、造化の氣に感じて生じ

といへども、僅高さ一尺餘の小松に寄生あるを、甚珍として、その主人に問ふに、答て曰、或時、邨漢戯れに此盆種の松皮に爪して、松寄生の子を其間に納む、翌日その所を見まへば、松脂出て其子を纏へり、數日を經て芽を生じて今かくの如し、其後佗木の寄生子をも納め試るに、絶えて生ずることなし、松にのみ、松寄生子を皮鱗間に納めて生ずること度々ありとへふ、その所をもて見まぢ、諸鳥松寄生子を食ひ、其糞を松樹皮間に落す時に、即生ずるなるべし、故に木の老嫩に拘

らび、寄生のるなり、韓冠二氏の説粗漏といふべし、

直云、草木育種後編（巻上）ハ、岩崎常正の説を載せて曰、寄生（ヤドリキ）を、加條木（エノキ）と生ビ、糙葉樹（クノキ）ハ生ぜビ、俗ヨトビサヽトビヅタなどいふ、四月の比、實熟シうるを、梨花海棠林檎枳椇（ナシ カイダウリンゴ ナシポヅナシ）等の樹皮へ實を付て置ベ、根を生シ、樹皮ヨ粘着シて、後ヨ葉を生ビ、又遠江ハて松グミ、江戸花師（ウエキヤ）ヨテツゲ松（ヤ）といふものあり、大葉小葉二種あり、大葉のもあり、葉柯（シヒ）樹の如く、小葉のもあり、葉石血（セキケツ）ヨ似タり、二種ともヨ夏月紅花を開ク形蔦蘿（ルコウ）ヨ似タり、後ヨ實を結ふ、直云、花の形甚小なり、其筒咲の本ヨ、即實とあるヨ其實熟シたるを採り、赤松ヨ粘貼（ネバリ）シて置く時ハ芽を生ビズ、トビサヽの事ハ猶試むべし、松グミハ松寄生なるべ然るべし、又清の張志聰が侶山堂類辨（巻下）ハ、桑上寄生ハ生（ス）于近海州野、及海外之境地暖不蠶、桑無剪採之苦、氣厚意濃、兼之鳥食搭實、糞落桑上、乘氣而生、搭（ノ）乃（ナ）易生之木、枝葉下垂、即生根作本、故其樹極大、多生于海山中、是以子附于桑、則為桑上寄生、といへるハ、然るや否をしらず、

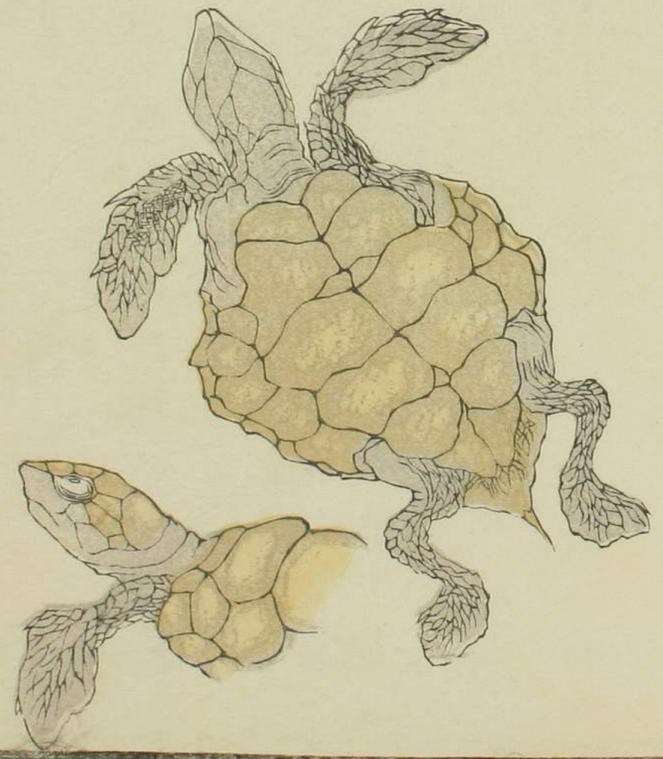
瑇瑁

瑇瑁と。一名文甲。典籍便覽よりて斑布。水族加恩簿 點化使者。同上 代尾。鄉藥本草 實除雙牙東西洋考巻五云 弘彩方言 ともいふ

直按ずるに。瑇の字。西京雜記巻六より玳に作る。俗字なり。瑁の字。說文解字巻一上 に。珇に作り。古本玉篇巻一 に。玳に作る。並に古文なり。瑇瑁の字。史記司馬相如傳 に出ず。爾雅郭注巻十 靈龜下 に。蝐蝐に作り。漢書注揚雄傳上引應劭 に毒冒に作り。一切經音義巻十一 に。古文作瞒瞒と見え。廣韻去聲巻五 に。眯瞒に作り。和名類聚抄巻十二 色波字類抄巻四 等に。瑇瑁音代昧と。和名を載せず。和漢通名なり。

瑇瑁。舶來に全甲にして徑尺餘の物あり。又片々離ずる物もあり。今櫛笄及諸器皿に用ふる品是なり。俗に鼈甲と呼ぶは誤なり。鼈をスツポンにして。其甲首飾の具に造るべき物にあらず。又瑇瑁を偽造せるに。構龜甲（カヽミカメ）。番水牛角。馬蹄等を用ふることあり。別條に詳にせり。和産の瑇瑁は。甲の徑四寸許の物。寛保癸亥の冬十一月。加賀宮腰浦に出て。其後石見よりも出しと

此圖々文政壬午の三月
本州羊婁郡田邊海
中にて獲るもの
其地の門人
石田欽二
らう乾
腊ものあり
寄る處の品
あり大さ圖の
如し



と本草啓蒙（巻四十一）に載せたり。我本州にては、一二寸より四五寸までの物。時々漁人の網に羅りて珍とするまたまたまれ。只文化三丙寅の年。夏四月七日。土佐赤岡浦の海中にて。漁人の獲たるも亦珍とすべし。大さ二尺許。形状蠣龜に似て首に喙あり。曲りて鸚鵡の喙に類ひ。背甲に中五片。左右各四片。總て十三片鱗次を形し。蠣龜の只一版にして。六角紋ありて。水龜（イシガメ）甲の如く形状に異なり。其甲淡黒みにして黄を帯び小なる深黒斑あり。裙邊に花（ビラ）ありて鋸齒様をなし。又四足に蹼ありて、前二ツに長く二爪、後二つに短く一爪形り、其首と四足と俱に鱗ありて、蛇皮文の如し。下甲に水龜と同しく黄黒色にして、尾に稍短し。又八丈島にて、大形る物ありといふ（直按ずるに、八丈風土記巻下に、島名アカバメとあるに、此蠔蝐を呼ぶ也、按ずるに、桂海虞衡志虫魚志に蠔蝐形似龜黿輩、背甲十三片、黒白斑文相錯、鱗差以成一背、其邊裾闌闕嚙如裾齒、無足而有四鬚、前兩鬚長、狀如撮、後兩鬚極短、其上皆有鱗甲、以四鬚擢水而行、海人養以鹽水、飼以小鱗、俗傳甲子庚申、日輒不食、謂之蠔蝐齋日、其説甚俚、といひ、明の呉

滙堂ゞ海槎餘録（廣百川学海辛集收之）ゝ玳瑁、産于海洋深處、其大者不可得、小者時々有之、其地新官到任、漁人必携一二來獻、皆小者耳、此物狀如龜鼈、背負十三葉、有文藻、即玳瑁也、取用時、必倒懸其身、用器盛滚醋、潑下、逐片應手而下、但不老大、其皮薄不堪用耳といへる此二説今本邦ゝ産ゝる物と的當せり、

直按ずるゝ背甲十三片の説を正しとすべし本草綱目（巻四十五）華夷珍玩考（巻八）彙苑詳註（巻二十四）正字通（午集上）譯史紀餘（巻一）嶺南雜記（巻下）海島逸誌（巻四）等ゝ十二片ゝ作り、廣東新語（巻二十三）ゝ十四版といふゝ皆謬なり、

秋海棠

秋海棠（汝南圃史 群芳譜）を、和漢通名なれ、略して秋棠（花曆百詠）一名斷腸花（採蘭雜志 禮白嶽記）爛腸草（三才圖會）八月春（群芳譜）といふ、此草今人家庭際に多く栽て、世人の識る品なれば、其ゝ形狀を略ゝ、大和本草（巻七）ゝ、寛永年中、中華ヨリ初テ長崎ニ來ル、ソレヨリ以前ハ本邦ニナシといへり、

直按ずるゝ、筑前續風土記（巻二十八）の土産考（巻下）ゝ、秋海棠ハ昔日本ゝ形し、正保年中唐士ゝ來る故和名

形」といへり、二書並に貝原氏の撰ふして、秋海棠の初めて渡る年を記せるに、二十年許の遲速あり、其是非をもとゝ、

然れども、本邦東國の深山中にも、自生の秋海棠あり、殊に下野安蘇郡栗野邊より出流山に多し、こゝにもてられて、正しく寛永年間より以前無りしもいひ〳〵いふ〳〵○一種白花のもの、白秋海棠といふ、清の沈歸愚が國朝詩別裁集（卷二十九）に、尤在京が詩を載せて曰、誰將清淚灑幽墀、散作瑤葩別有姿、最是玉人腸斷後、淡粧無語背人時、（又卷三十）朱念裡が詩に曰、清秋湛露浥瓊芳、素影風搖玉砌旁、夜靜看花人獨立、水晶簾外月如霜、（直云屈翁山詩集卷八、存研樓詩集引十五、白秋海棠の詩を載せり）

直云、閩小紀（卷上）に、連江鋏髯隱處、秋海棠、高一丈餘、圍可一二寸許（注）といへり、總て此品は限らず、暖國にて、草の冬枯しして高大なる物多し、今因に諸書に載せたる十の一二を茲に舉ること左の如し、

南方草木狀（卷下）云、交廣、草木經冬不衰、故蔬圃之中種茄、宿根有三五年者、漸長枝幹乃成、大樹、毎夏秋盛熟、

梯樹採之五年後樹老子稀即伐去之別栽嫩者　東西洋考（卷四）啞齊物産云一紗志大茄樹高丈餘經三四年不瘁子大如西瓜重十餘斤以梯摘之　霏雪錄（古今說畧第三十一）云安南甘草大者如柱土人以架屋吾友唐愚士西游親見之　華夷花木考（卷三）云大蒿容梧道中久無霜雪處年深滋長大者可作屋柱小亦中肩輿之杠湧幢小品（卷二十七）云容梧之蒿可棟高潘之蕨可杖蘇門答剌之瓜茄一植而五歲儋州之荷四時作華木蘭皮國有五尺之瓜三寸之麥暹羅之稻粒盈寸屯羅島之麻實如蓮菊　清陳子重滇黔紀旋（說鈴前集卷二十五）雲南條云草麻樹數十年不凋其本可作梁棟土人以之搆堂屋　香祖筆記（卷十二）云予昔奉使廣州親見草麻樹扁豆樹茄樹八丈島志（卷中）云番椒數年不凋後よい樹と形る　重修本草啓蒙（卷二十）云阿波海部郡出羽島ニ茄子年ヲ経テ枯レズ三年ニ至レバ子ヲ結ブ甚少ナシ冬月掩ハサレバ苗枯ル　此外本州みて多臙脂花（ラレローバナ）秘傳花鏡丁香茄苗（ウチナスビ）救荒本草茫芒決明（ハブサウ）本草綱目日々有（ヒバサウ）質問本草アルマグモグト（俗称セリ）（ヤハン）含羞草（ドムリグサ）臺灣府志等の屬、

九十月ころ、禾稈をもて霜雪を掩ひ置き、來春ふ至り、其舊葉を落て、本幹ハ枯びして芽を生し、秋ゑ至ル花を開き子を結ぶ、然るども、皆昨年の物ゑ比を見ハ、形小なり、暖地ゑてハ猶此類多あるべし、

雞核樹

今藥中の雞核仁ゑ、本草綱目 巻三十六 灌木類ゑ出ル、和産なし、核ゑ舶來ゆり、文化三丙寅の夏、本府の藥店、長谷川吉兵衛といふ者、新渡の雞核仁五十粒許、我園中ふ下ル、僅ふ二本を生ビ、八月ふ至り、高さ二尺許、本幹ハ

稜かくしく少し扁形なり、其本幹より左右互に枝を分つこと七八ホして、其枝に六葉以上粗に互生し、一葉の形、午時花の末葉に似て、本廣かくして、鋸齒粗し、枝葉の本毎に小刺あり、木長せざる故に其刺衆なり、惜むべし、其年の冬寒に傷られて枯る、時珍の說に據へ、爾雅に釋木、棫、白桵、郭璞、注に、桵、小木叢生有刺、實如耳璫、紫赤可啖とへふもの是なり

直云詩の大雅、緜章、柞棫拔矣の棫を鄭箋に、白桵也といひ朱傳に、棫、白桵也、小木亦叢生有刺といふて、此猶核樹のごとくにして、又陸璣が詩疏に、三蒼說、棫、卽柞也、其材理全白、無赤心者、爲白桵、直理易破、可爲櫝車輻、又可爲矛戟矜、今人謂之白桵、或曰白柘といひ、詩經大全に、東陽許氏曰、棫材理易白、直理易破、可爲櫝車輻といへるハ、本草綱目に、時珍の說に、檪有二種、一種不結實者、其名曰棫の棫にて、雄クヌギなり、正字通に、陸璣の說を駁して、詩大雅、柞棫拔矣、合舉二木、非棫卽柞也、陸璣詩疏引三蒼說、棫卽柞、爾雅、鄭註、棫卽山柘、鄭樵通志、柞木曰

棫曰栩溷合爲一並非とゝひ清の陳啓源が毛詩誓
古編卷十七小毛柞棫爾雅云〻郭注云〻陸疏據三蒼說呂
爲棫卽柞其材理全白無赤心者爲白桵孔疏並存兩
說不能辨其孰是朱傳本从郭注而大全引東陽許氏
語申之則純襲陸疏之言與朱意正相反而引以爲證
舛矣按白桵本艸用其核爲藥名蕤核入本經上品陶
隱居云大如烏豆有文理如胡桃核蜀韓保昇云葉似
枸杞而狹長華白子附莖生紫赤色大如五味子多細
刺宋蘇頌云木高五六尺莖間有刺此三家注所紀物
色形相皆與郭氏同朱子獨取其說良有見矣至陸疏
之棫亦載本艸言櫟有二種一種不結實者名棫是也
然非此詩之棫とゝふて辨ぜず猶詳ならゝ予
が詩經名物集解卷三に載ゝ

金雀花

明の金幼孜が前北征錄紀錄彙編卷三十二に云金雀花々似決
明莖似枸杞有刺葉小圓而末鋭人采取其花食之群
芳譜貞部卷二に云金雀花叢生莖褐色高數尺有柔刺一簇
數葉花生葉旁色黃形尖旁開兩瓣勢如飛雀甚可愛春

（致富全書作二月盡始花一）

初即開。采之滾湯入少鹽微焯。可作茶品清供。春間分栽。最易繁衍。　欽定盤山志（巻十五）に云。金雀花黄色叢生。有刺。開最繁。形類金雀。○此外。花史左編（巻五）。致富全書（巻三）。遵生八牋（巻十六）。秘傳花鏡（巻三）。其餘諸書に多く見ゆ。以上の諸説にしたがふ。初編中巻に載たる救荒本草の錦雞児花。一名壩齒花と同物なり。今花姑（ウコギヤ）にて。ムレスヾメと呼ふ。蘭山翁も。金雀花をもて。エニシダに充つるは誤なり。

直按するに。山中信古の説に。百品考前編（巻下）金雀花（ムレスヾメ）の條に。嘉興縣志（巻十）の金雀花。一名飛來鳳。鹽浸可以點茶といへる文を引きて。一物とせり。然れども。花史左編（巻三）花之名目。及び六研齋二筆（巻三）花の名を列出せる條に。金雀花と飛來鳳と別に出せり。又名花譜に。金雀花の條無く。黄雀の條ありて。狀如飛雀。深黄可愛といへるは。金雀花なるべし。又別に飛來鳳の條ありて。一名鷂雀。亦金雀類也とみえたり。此三書に据れば。金雀花と飛來鳳は二物にして。飛來鳳は。エニシダなるべし。嘉興縣志に。一物とせるは誤なりといへり。此説を優れりとす。エニシダは後巻に辨ず。

榕

榕〔そよう〕案〔正字通〕槦〔華夷花木考〕ハ作る。一名不死木〔物理小識〕又倒生木〔通雅〕倒生樹〔廣東新語〕ともいふ

直云。廣東新語〔巻二十五〕ハ。榕〔容也。常爲木厦以容人。能庇風雨。又以材無所可用爲斤斧所容。故曰榕〕自容亦能容乎人也といへり。説文解字〔巻六上〕案〔の注〕ハ。松〔或從容〕とありて。松〔の重文と〕。玉篇〔巻十二〕ハ。案〔を松〕の古文とハ。誤ることと正字通〔辰集下〕ハ辨せり。通雅〔巻四十三〕ハ。榕〔當別出。狀木始于蕃舍。分字始于戴侗〕といへり。

戴侗字仲達宋淳祐德祐間人

著書故三十三巻

六書故〔第二十一〕植物一考ふべし。槦〔を華夷花木考〕ハ。宋志〔引海物異名記云。榕〔或作槦〕言材不中梓人也〕と見えたり。字書類を閲ハるハ。槦音庸。樗槦木中箭笴といひて。榕〔と同字のことハいまゞ見當らず〕。此樹を晉の嵇含が南方草木狀〔巻中〕ハ始めて形狀を詳ハ載ハ。其後唐宋元明清の諸書ハ載ること甚多し。直云。予曩ノ榕樹録一巻を録して。唐山群籍の説を悉く引載ハ。此條の前後。唯其要を引くのみなり。明の凌登名が榕城隨筆〔續説郛弓二十六〕ハ云。閩中多榕樹因

羅、榕城（直州郡城中。榕獨盛。故羅榕城。）按太平寰宇記巻一百云。福閩以北無此。其在江南。則冬青之属也。而枝幹柔脆。幹既生枝々又生根垂垂若流蘇。少着物即榮繫。或就本幹自相依附。若七八樹叢生者。多至數十百條。合并爲一。蜷蜷樛結。柯葉蔭茂。其偶成章者。垂若偃蓋。曲若虬龍。似亦可觀。嶺南雜記巻下云。榕樹。閩廣最多。他省則無。故紅梅驛以北無榕。大者蔭十餘畝。離奇古怪。備木之異。衙署多植以爲蔭。然體曲不中梁柱。理斜不中材用。質虛不中薪爨。莊子所謂以不材壽者也。漳浦黃石齋先生有榕頌。植于水際。其子可以肥魚。細枝曝乾束爲炬。風雨不滅。其鬚製藥。可以固齒。其脂乳可以貼金接物。與漆相似。嗚呼人但知有用之用。而不知無用之用也。

離奇字見前漢鄒陽傳。奇怪通。

直云。雲仙雜記巻下。小児瘡痂。以榕粉日傅之。則易瘡而無痕。出汗漫録。

雲仙雜記を偽妄の書なる事韓集點勘巻二に辨ず

といへるは。いまだ試みず。

和産も。南海の暖地なるゆゑ。薩摩にてアカウ。又アコギ

又アコノキ。又アコミヅキとも。

直云。又江戸の種樹家にて。沈香木といひ。或は伽羅木といふ。元明の陳懋仁が泉南雜志巻上に。榕樹千

年、者、其生生加楠香といへる説ありて、名づけしも
の形なるべし
本州にても、南海部衣奈莊衣奈浦より、日高郡三尾莊
比井浦邊までの間、處々に産し、方言オホギノ木といふ、大なるハ高さ數十丈圍數抱、葉ハ互生し冬枯まゝ
にて、三月頃新葉生し、舊葉落ること交讓木の如し、直云、草木性譜人の卷ハ、葉冬凋落ハとハふハ、土地の異形なるへし、其葉光澤ありて、形冬青葉ハ似て濶く、天仙果葉に似て厚し、紋脈ハ異形なり、
莖葉共に斷て白汁出り、七月頃、花無くして、本幹及孫
枝所を定めず、忽然と實を結ぶ、形無花果に似て小さく、初青緑色に白點あり、熟して紅紫色黄點ハ變ず、果
中も亦無花果の如くにして、味甘し、日高の小児イヤウノミといふハ、採りて食ふ、毒形し、此樹經年のもの、
本幹及枝上より、長細根鬚下垂して、次の枝ハ着き、其
着きたる枝より、又長細根鬚下垂して、又次の枝に着
き、如此なるもの幾數ハして、鬚梢地に入て、復幾幹を
叢生し、終に怪狀をなす、誠に南方の一奇樹といふべし、
直云、此樹怪狀をなハの全圖を、紀伊國名所圖會日

榕 アコノキ

榕一種 カツヽル

高郡三尾荘産湯浦の條ふ據りて茲に載せべ。佗日
刻成を俟てゝ校べし。
日高郡小児其鬚を紐ゆ形〳〵玩ぶ。四五尺ゝり。長き
もの〳〵數丈ゝ至る。廣東新語（巻二十五）ふ。榕之怪在根自上
生下語曰榕木倒生根々小者俗稱榕鬚拂水生波千絲
萬縷始為鬚中為根終為幹故幹在中新幹在外表裏相
合狀益臃腫可愛也といへり。其枝梅雨中ふ挿て能活
ひ。其幹大形るゝ。中空ゝ成り質脆し。材と形らず。秋ゝ
至り。此樹ゝ菌を生ず。オホギタケとゝふ。羹と形し食

ひ。味美ふゝて王蕈ゝ勝り毒なし。怡顔齋の菌品（木蕈類）
ふ。榕樹薩摩ニ多シ。土人アカウノ木ト呼ブ。此樹ニ菌
ヲ生ス。アカウナバト名ク。西州ノ人菌ヲナバト云フ
此菌推タケニ似テ大ナリ。色白ク味美シ。生乾共ニ食
フベシ。但シ久シク蓄フベカラズ。是形り。
直按そるふ榕の一種。薩摩ふガツマルと呼ふ物ゝ
り。よゝガツマアル（草木錦集）とゝふ。ゝれも形狀大抵
榕と同しく高大ふゝて。葉も亦互生ひ。形榕葉ゝり
濶く稍短し。鋸歯形く光澤ゝり。夏月花無く實を結

ふこと榕ハ同し。枝幹の根鬚榕ハ多く生して怪狀を形し易しといふ。一說ハ閩書の赤榕を充り。南産志巻上ハ榕有二種。一種矮而盤桓。其鬚着地復生為樹。一名赤榕。上聳高大華夷花木考巻三王氏彙苑巻三十一も此文の一種名赤榕最為高大と作る。と載る。矮而盤桓の物いまゝ見當らず。赤榕ハ。アカウともガツマルとも此文まてハ考へゝ。又奥熊野四箇並鵜殿村の宮山に産する。花タチバナといふ木を所によりてガツマルといふ。花タチバナなるも同名なり。皆後巻に詳なり。直又按ずるハ。近來ガツマルを本草綱目巻三十一に載

ける波羅蜜樹に充つ。恐らくハ非なり。廣東新語巻二十五臺灣府志巻十八ハ波羅蜜を詳に解けり。右三書を考ふるハ。實大如斗。重三四十斤。殼内肉層疊如橘柚囊といへり。譬ガツマルの熟國の地に育して。實の大さ如斗に至るとも。果中層疊して。橘柚囊の如く形る物とも思はれず。然れども。時珍の說ハ樹類冬青葉極光淨不花而實といひ。嶺南雜記巻下ハ波羅蜜與大葉榕相類不花而實々生枝間或根上といへるを見るに。ガツマルも其屬形るへし。詳形る事ハ予

擇音必

ゞ重訂増補本草啓蒙（巻十九）小辨ゞ

直又按ぜるゝ大般若經（巻五百七十）音釋云擇鉢羅梵語也。樹名。佛坐其下成道。故又稱菩提樹。唐の僧法藏ゞ華嚴探玄記（巻二十）ゝ云。菩提樹。又名畢鉢羅樹。此云榕樹。在嶺南。亦有此類可知　八紘譯史（巻二）天竺物産ゝ云。菩提樹。不花而實。人不可食。其枝下垂附地生根。若柱。歳久結成巨林。人蔭其下。無異屋宇。至有容千人者。以為佛宇。　山中信古の考小草木育種後編（巻下）小以上の諸説ゝ据うて榕樹即佛家ゝいゝ菩提樹なうとゝいへるゝ誤り。廣東新語（巻二十五）ゝ榕樹のことを至うて詳ゝ辨じ。又同巻別條小。菩提樹を載せて。訶林有菩提樹。蕭梁時。智藥三藏自西竺持來。今歴千餘年矣。大可百圍。作三四大柯。其根不生於根。而生於枝。根自上倒垂。以千百計。大者合圍。小者拱把。歳久根包其幹。惟見根而不見幹。々已空中無幹。根即其幹。枝亦空中無枝。根即其枝。其葉似柔桑。而大。本圓末鋭。二月而凋落。五月而生。僧采之。浸以寒泉。至于四旬之久。出而浣濯。渣滓既盡。唯餘細筋如絲。霊微蕩漾。以作燈

惟笠帽輕弱可受持贈遠人比於綃縠其姿者以之入
爨矣と見えたり。即八紘譯史の菩提樹と同物なり。
又同卷別條に梛といふ樹を載せ。之れも通體根鬚
蟠結。大可數十抱。或を似榕非榕など見えたり。嶺南
ふれ。かくの如く樹上より根鬚を生ずるの類多く
ありと見ゆ。故に探玄記に混じて一物とせる非り。
阿部氏廣東新語を熟閲せざるして漫に探玄記の誤
を襲ひしものなりといへり。然るべし。菩提樹へ
和漢同名多し。次篇に辨ず。

梛音患

直又按ずるに、環海異聞、巻十漂流人魯西亞都府滞
留中の條に、漂流人を一日國王の涼處といふ所へ
遣し一見いとさせたり、其廣庭の内に、長さ一町程
の棚を架し、その外に纏ひもぐるとし異木ありいく
つもの枝垂を出て根と形し根子なり、葉い樟に
似て圓し、花い紫にして藤豆の如し』といへるを、大槻
氏、南方艸木狀などを引きて、榕樹形るべきなりと載
せるい大形る誤形り、榕樹に本文よりもいへる如く、花
ありるものに小ありび、又性寒を畏る、本邦にても、京

攝及東都小載る物ハ、僅盆玩の小樹のミ小〳〵て、冬月土窖ニ藏めざれハ育〳〵ごゝ、況魯西亞國の如き寒地小育ひべきものハいかゝ。

桃洞遺筆巻之五終

舊本秘書